

Title	古版経済書解題 一千八百二十四年版 ウィリアム・タムソン著 人間の幸福に資すること最大なる富の分配の原理に関する研究 其の他
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.10 (1938. 10) ,p.1419(107)- 1448(136)
JaLC DOI	10.14991/001.19381001-0107
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19381001-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古版經濟書解題

一千八百二十四年版ウイリアム・タムソン著『人間の幸福に資すること最大なる富の分配の原理に関する研究』其の他

高橋誠一郎

ウイリアム・タムソンは一千七百八十三年の頃に生れ、一千八百三十三年を以つて歿した愛蘭の社會主義者、經濟學者であつた。彼は同國マンスター州コーク郡の富裕なる地主であつて、其の所有地は一千四百エーカーに及んで居つた。(John Minter Morgan, *Hampden in the Nineteenth Century*, 1834, vol. ii, p. 299.) 彼は、一千八百二十七年、自ら其の著中に於て、彼が約十一年間、他人の勞働の產物たる地代と稱せらるゝ所のものに養はれて生活して居つたことを記してゐる。(Labour Rewardeed, 1827, preface)。資性、純潔無慾にして公共心に富み、又倫理、社會及び政治科學に對する熾烈なる研究欲に燃えて居つた。彼はダブリン、牛津及び倫敦等の諸大學に學び、初め功利學派に參して啓蒙の路を求めた。倫敦大學の學窓に在つた頃、早くジョン・ミィ・ベンサムを知り、深く之に傾倒し、彼を以つて、ベーコンが自然科學に對して爲した以上のものを倫理科學に對して爲せ

るものと做し、而して自己を以つて單に其の師の原理の適用を遂行せるに過ぎるものであると述べてゐる。兩者の間には非常なる親交が結ばれて居つたやうに見える。ジョン・ボーリングの監修の下に刊行せられた『ベンサム全集』には、コーグに要句學校(a Chrestomathic school)を設立するの件に關し其の意見を徵せるタムソンに答へた彼の一千八百十九年四月七日附の書翰が載せられてゐる。次いで一千八百十九年九月二十九日附の第二書翰に於いて、ベンサムは倫敦滯在中は自己の「幽居」に逗留する可きことをタムソンに勧め、其の家庭内の習慣を彼れに報じてゐる。(The Works of Jeremy Bentham, vol. x, pp. 506-507)。爾後、タムソンは數年間ベンサムと一緒に住んで居つた。彼れがベンサムの功利主義學説に對する信仰は甚だしく強烈であつて、後に至つて彼れが深く歸依するに至つたロバート・オーヨンの思想を以つて、社會全般に對しては全然不適當なる「一個の改良貧民管理法」に過ぎざるものと看做して居つた。彼れが斯くの如き思想を有して居つたのは凡そ一千八百十八年の頃であつた。然しながら、彼れ自らの物語るが如く、分配の問題に關する不撓の研究は、遂に彼れを導いて別箇の結論に到達せしめた。(Labour Rewarded, op. cit., pp. 98-9)。極端なる自由主義と社會主義、自由に對する愛と平等を求むるの念とは調和を看出すこと能はずして、彼れの腦裡に戰つた。一千八百二十二年は實に彼れの生涯の轉換期を畫するものであつた。ベンサムは決して政治的急進主義の限界を踏み越えることなく、殊に共產主義に對しては有力なる反対者であつた。然るにタムソンは遂に彼れの立場をベンサム主義より移してオーヨン流の協同主義の上に置かなければならなかつた。彼れは如何にして、又、何が故にベンサムからオーヨンに赴いたかを靜かに考へた。斯くて彼れは一千八百二十二年、其の默想の結果として得たるものを浩瀚なる一書に取り纏め、之れを『人間の幸福に資すること最大なる富の分配の原理に關する研究』(An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth most

conducive to Human Happiness; applied to the newly proposed system of Voluntary Equality of Wealth.) と題して、一千八百二十四年、倫敦に於いて上梓した。彼れはオーヨンの平等主義に於いてベンサムの最大幸福の概念を實現せんことを期待したのである。(本書の序文が一千八百二十二年を以つて起草せられたるに徵して、本書は略々同年迄に脱稿せられたものと見ることが出來よう。Cf. Ibid., ed. 1824, p. xiv.)。

著者をして本書を著すに至らしめた直接の動機は、知識の普及を目的としてコーグ市に設立せられた一學藝協會に於いて、巧妙なる經濟論客として名聲ある紳士が現存するが如き富の不平等の利益、貧者が富者に對して感ず可き從屬及び其の結果たる感謝、亞米利加合衆國の餘りに大なる自由及び餘りに大なる不平等並びに之れに類する論題に就いて其の意見を表明せるの事實である。(ibid., pp. xviii-xix)。彼れは當時存在しつゝあつた社會的諸法制及び施設の批判に充てられた一百頁より成る一章を草したのであるが、不必要の刺戟を豫防するが爲めに暫く其の上梓を差し控へ、唯だ其の項目を列記するに止めてゐる。(ibid., chap. v, pp. 363-366)。

II

タムソンはベンサム學徒の公式に従つて表明せられた功利の原理と、ジョン・ロックに發し、アダム・スミス及びリカードオによつて承認せられたる觀ある勞働は富の唯一の泉源なりと做す個人主義的思惟から出發する。善惡、遠近、總べての結果を計量する功利の概念、即ち、人間幸福の最大可能なる追求は、タムソンの研究に於いて常に標的たる可き嚮導原理であつて、他は悉く皆、之れに對して從屬的地位に立つに過ぎない。彼れ曰く、「エルヴィン・ウース、プリーストリ、ペーリィ及び其の他の諸家によつて承認せられた此の原理はベンサムの Introduction to the Principles of Morals and Legislation. 及び有名なる Traité de Legislation. の最初の數章に於いて發達せ

しめられ、永遠に確立せられて、倫理學上のあらゆる他の虛偽の標準を排斥するに至つた」と。(The Distribution of Wealth, p. 1.)。

ベンサムに従へば、人は其のあらゆる行動に於いて、功利の原則に嚮導せられて幸福を追求する。生活上に實現せられたる功利の原則は即ち幸福である。經濟的領域内に於ける功利の原則の實現は即ち幸福に資する物質的物件、換言すれば富の形成である。彼者は其の A Manual of Political Economy. に於いて、國富、即ち一國內に於ける享樂資料の總額と、「相對的富裕」(relative opulence)、即ち其の國民の員數に對する此の總額の割合、略言すれば、平均的若しくは各人宛の富を區別し、前時期に於ける平均的の個人よりも後の時期に於ける平均的の個人が富裕であつた場合には、相對的富裕は兩時期の間に於いて増加せるものと説き、而して富の主たる目的は安易幸福 (well being) であり、物質的物件が價值、即ち安易幸福に奉仕するの性質を有するとしたならば、そは富であると述べてゐた。(The Works of Jeremy Bentham, vol. iii, p. 36 b, note 1, p. 82 a.) 而して、彼は他の事情にして等しかつたならば、富にして愈々平等に分配せられんか、幸福の總量は愈々大なる可きことを認めたのである。

タムソンは斯くの如きベンサムの思想を承けて言ふ「如何なる題目と雖も、富の分配よりも興味あり、又正しく取り扱はれたならば、之れよりも有用なるものは存することがない。蓋し、あらゆる社會の物質的安慰が、富の公正にして賢明なる分配の上に直接に依存するのみならず、延いては又、其の到達し得る範圍内に於いて知的享樂の其れと等しく、德性の高、同情、慎重及び仁愛の高も亦、之れに依存することの頗る大なるを看出さる可きが故である」と。即ち、タムソンの論ぜんとする所は、現存社會制度の下に於いて、富の分配が如何に行はるゝかではなくして、彼の理想とする「自然的」原理、自然的準則若しくは自然的法則の作用する下に在つては、そは如何に行は

れなければならぬかに存したのである。彼は語を續けて曰く、「茲に研究せらる可き分配は、人間幸福の『最大可能なる高』、即ち『最大多數者の最大幸福』を助成す可きものである。茲に所謂最大多數者は決して單純なる多數ではなくして、全社會の十人中の九人、若しくは百人中の九十人であることが曉がて明かと爲るであらう。洵に、『全體の眞の幸福、犠牲と爲れるの觀ある少數者の眞の幸福すら、最大多數の最大幸福と一致することが明かと爲るであらう。從つて人間幸福の最大可能なる高、最大多數の最大幸福、社會の幸福及び全體の幸福は殆んどあらゆる場合に於いて同一の意味を有するものであつて、大體に於いて、無差別に使用せられ得るものであると」。(Distribution, op. cit., pp. 1-2)。

然しながら、富の定義に關しては、タムソンはベンサムを離れて純然たる古典的經濟學說に依據する。富は勞働に依つて生産せられる。勞働以外の如何なる他の要素と雖も或る欲望の對象物を富と化するものではない。勞働は富の唯一の一般的尺度であつて、又、其の顯著なる特性である。富なる語は、享樂の物質的資料又は手段中に在つて、有生若しくは無生の資料即ち自然の生産物の使用に向つた人間の勞働及び知識によつて給與せられた部分を指すのである。交換價値は殆んど常に富の觀念に附隨して居るが、而も之れに對して缺く可らざるものではない。蓋し、小共同團體は、何等の交換なく、唯だ共同の勞働に依つて富裕であり、又、幸福であつたが故である。勞働なんか富はない。勞働は其の區別的屬性である。自然の作用は毫も富を構成するものではない。其の力は富たると否とを問はず、あらゆる享樂若しくは欲望満足の資料の生産に際して、全然平等且つ共同に作用してゐる。勞働は富を取つて唯一の父母である。國民的富は、恰も個人の手に集積せられた富の實體の合計に外ならざるものである。土地、空氣、熱、光線、電流、人間、馬匹、水は其れ自體に於いては、孰れも富の稱呼を受く可き資格がない。是

れ等のものは欲望の目的物、幸福の対象ではあるであらう。然しながら、之れを化成する労働の手が觸れる迄は、是れ等のものは未だ富ではない。人口稀薄なる地帶に夥しく存在する馬や角ある家畜の群れが富の対象でないことは、恰も空氣や光線に等しいのである。是れ等のものは其の所要に比して多數に存在してゐる、彼れ等は人間の努力に依つて生産せられたものではない。其の或るもの占有するに必要な労働を行ふ者は何人と雖も其の所有者と爲る。而して、以前には唯だ可能なる欲望の対象に過ぎなかつたものを、單なる獲得の労働が、富の目的物たらしめる。此の動物の價値は全く之れを駄目として、若しくは肉又は單に其の皮のみの使用の爲めに、之れを轉用するに必要な普通の腕力と技能とを有する人々の労働の平均量に依存する。文明社會に於いて優良なる一頭の馬を對しても同じことを爲したのであるが、是れ等のものは富の目的物ではない (*ibid.*, p. 6-7)。富は享樂の有形的資料に限られてゐる。労働、即ち筋肉的動作は惟り有形的物件の上にのみ作用せしめられることが出来る。是れ等のものゝみ惟り蓄積せらるゝことが出来る。*(ibid.*, p. 8)。物の單なる被欲求性、稀少性、美、快感若しくは效用は之れをして富の目的物たらしむることがない。有形的物件に加へられた労働のみ惟り之れをして富の目的物たらしめる。*(ibid.*, pp. 16-17.)。

然しながら、タムソンは富を構成するものが單に費さるゝ労働のみならず、又、節約せらるゝ労働であることを附言しなければならなかつた。乾燥した砂地より成る諸國に於いては、泉は富の泉源であるが、土地は之れを擅有するの煩勞に値せざるが故に、何人の財産でもない。吾人は自然が泉を生産したと想像す可きが故に、労働は之れを造るが爲めに必要ではなかつた。其の水を汲み取る労働も亦、其れのみでは估料せらる可きでない。然しながら、

其の地點に於ける其の泉の存在は、其の存在がなかつたならば、其の最も近い供給から其處に水を齎すに必要な可き「労働を節約する」、而して其の泉の價値は斯くして節約せらるゝ労働の定量によつて測定せらる可きである。*(ibid.*, p. 9)。建物の敷地の價値は其の位置の節約す可き運搬及び其の他の關係に就いての労働の定量に依存する。*(ibid.*, p. 14.)。

タムソンは、投費せらるゝ労働たると節約せらるゝ労働たるとを問はず、労働は富の物品の價値の「唯一の」尺度であることを主張するものではあるが、而も、這箇唯一の尺度は總べての場合に於いて「正確なる」尺度であることを主張するものではない。一物品は富の一品目たるが爲めには願望の目的物でなければならず、又是れ等の願望及び選擇は有形及び無形兩様の事情、殊に自然の物質及びエネルギーを利用に轉ぜしむるの手段に關する知識(學問及び技術)の多少と共に變化するの傾向あるが故に、労働の絶對量が是れ等のものに對する或る一定の正確なる指標たり得ることは明かに不可能である。餘冗の裝身具は野蠻人や廷臣によつて欲求せられる。代議自治制の下に於いては、是れ等のものは眞價を與ふる物として顧みられざると等しく又、其の商的價値、眞の使用の價値に低下せしめらる可きである。無知の國民は彼れ等の海岸に於ける海藻と珪質の砂とを顧みることがないであらう。是れ等のものを熱して一物體に合一することに依つて、彼れ等の住宅に於いて光線と溫暖とを享有するを得可きである。而して、更らに低廉なる代用物として他の物體が是れ等のものゝ地位を滿す可しとしたならば、是れ等のものは他の目的の爲めに欲望せらるゝことがない限り、文明國民によつても同じく顧みられないであらう。主張せらるゝ所のものは、或る一定時に於ける或る一定の願望を有する或る一定の社會狀態に於いては、願望の対象の上に普通の判断を以つて使用せられた労働は、是れ等のものゝ價値の唯一の尺度であり、而して、斯くの如き事情の下に於いては、

正確なる尺度であると云ふに存する。土地の面積及び多數物品の原料の供給が依然として變化なく、同時に人口と知識とが増加しつゝある間は、願望若しくは趣味が人類の倫理的及び知識的状態の改善と共に變化する間は、富に適用せらるゝが如き何等正確なる価値の尺度は與へらるゝことを得ない。之れを求むるは、影を追ひ求めるものである。勞働若しくは努力以外の何物と雖も、願望の対象の富の対象への轉換に對して何等の關係をも有せざるものである。是れ等のものは恐らく總べて其の性質を變じ、或る時には富の目的物たるもののが、他の時には單に願望の目的物たるに過ぎざることある可く、若しくは願望の目的物たることすらなきに至ることがあるであらう。(ibid., p. 15.)。

而して曩きには節約せらるゝ勞働によつて建物の敷地の價値を説明せるタムソンは、其の直後に於いて、遊園の價格が富者の願望の競争に依存するものと觀た。富が不正に分割せられたる時、並びに大なる愚昧が大なる富と結合せる時には、是れ等のものに對して限界を定めることは困難である。其の農業的若しくは建築的價値以上に氣紛れによつて著しく過大に評價せられた一地點の取得が、其の取得者の方に生ぜしめた他の享樂の喪失は這般の競争に對する殆んど唯一の抑制である。若し農業地を創設し得たよりも幾分以上の勞働が、等しく、遊園として氣紛れに適する新たな地所を創造することが出來たとするならば、斯くの如き勞働の高は其の價値を標示したであらう。然しながら、是れ等の氣に入つた遊園は概して其の面積に於いて限られて居つて、勞働によつて模造し得ざる底のものである。是に於いて乎、是れ等のものは必然的に限定せられた供給に對する多少の程度に於いて理性的なる願望の競争より生じつゝある其れ自身の餘剩價値を有する。然しながら、タムソンを以つて觀れば、其の農業的若しくは建築的價値又は健康上及び勞働によつて評價せられ得るあらゆる他の有用なる目的上の價値以上に出でたる這

般の餘剩は、彼が後に述ぶ可きが如く、富の自然、無拘束且つ最有用なる分配の行はるゝ下に於いては殆んど存在することがないか、若しくは單に極めて小なる範圍まで存在し得るに過ぎない。這般の餘剩はあらゆる共同社會の富及び幸福のスケールに於いては估料せらるゝことがないが、若しくは估料せらるゝの價値なき純然たる人爲的の價値である。然も猶ほ總べての場合に於いて、願望及び勞働の兩成分は富の目的物を構成するが爲めに必要である。自然が其の物品の供給を制限し、斯くて勞働が願望の需要する所のものを供給し得ないならば、氣紛れの人爲的價値は生ずるのである。然しながら、普通の場合に於いては、富の物品の價値は之れを生産することの出来る勞働の最少量に及ぶが故に、茲に氣紛れの價値は斯くの如き範圍にすら到達することを得ない。殆んど如何なる勞働を形成し、若しくは其の大さに於いて是れ迄に知られてゐる最大のものに等しい新しいダイアモンド又は之れに類する燐然たる裝飾物が發見せらるゝ迄、大地を穿鑿し續けるが如きことを得ない。是に於いて乎、斯くの如き餘剩人爲價値すら、タムソンは彼の準則内に入るものと考へる。蓋し、そは實だに同様の物品を生産するに必要な労働量を斷じて「超過」し得ざるばかりではなく、そは殆んど這般の量に達することがないからである。(ibid., pp. 14-15.)。

タムソンは又、肥瘠孰れを問はず、土地の價値は必然其の上に施された普通の熟練及び判断によつて指導せられた勞働量に依頼す可きものと觀た。更に又、彼は「より大なる熟練が、他のものに於けるよりも、一種類の勞働に於いて、又、同一の仕事に從事する一人の勞働者によつて用ひられるることは明かである。然しながら、是れ等のものは其の社會の普通の勞働に分解せられる。或る特殊の仕事に於ける異常の熟練により、若しくは前以つて修得す

るの労働を著しく費すことを要する仕事に於ける普通の熟練により、一個人が普通の熟練若しくは未修得の熟練を以つては四日以内に仕遂げることの出来ない所のものを一日にして成し遂げるとしたならば、斯くの如き労働は普通の労働の價值の二倍である。一日の労働の價值の評價は其の社會の労働部分の普通の業務に於ける普通の熟練及び勤勉によつて生産せらるゝ所のものである。又、危險、悪臭、有毒瓦斯、濕氣、寒氣、特別の努力の如き、特殊なる労働の種類の價值を増加する他の事情が存する」と述べてゐる。斯くて、タムソンはリカードオに學んで、あらゆる種類の労働を單純労働に分解し、之れを労働時間に還元して量的に表現し、以つて、労働は人間社會の變移しつゝある事情の下に於いては富の目的物の相對的價值の正確なる尺度ではないが、而も、そは最もよく這般の標準に接近するものであり、又、吾人が願望の目的物が富の目的物たるか否かを判定し得る唯一の標準であること

を主張するのである。(ibid., p. 16.)。

而も、彼は純然たる通商上の目的を以つて一植民地が狹隘なる不毛の地點に設けられたと假定して、其の附近に於ける僅少なる不毛地の價值は其の上に費された労働量によつて決定せられ、而して其の労働量は、苟も氣候及び便宜の許した物品を、之れと品質相等しき物品が最も低廉に接近し得る市場よりして輸入せらるゝを得ると同一の條件を以つて、販賣し得るが爲めに其の上に費すことが必要であつたか、若しくは必要なる可き量によつて決定せらるゝと論じ、而して、葡萄畑、柑橘林又は穀園に對しては這般の労働の總高並びに、所謂資本の必要なる利潤及び管理を合計したる高よりも、更に多くの貨幣が要せらるゝとしたならば、そは損失なくして費さることを得ない、蓋し、其の地點の生産物は、競爭的外國品と鬭ふに必要な年々の耕作の費用並びに放下せられた資本の利子を償還することなかる可きが故であると説きながら、ローエンタール(Esther Lowenthal)博士の指摘せるが

如く、(The Ricardian Socialists, 1911, p. 33.)「如何にして利潤が労働の名辭に還元せらる可きかに言及する」とがなかつたのである。(Distribution, p. 13.)。

III

タムソンは其の論旨を進める。萬有の本性の許容する生産に對する最も強大なる刺戟であり、又、最大なる生産に對して必要なるものは之れを生産せる者に労働の產物を悉く使用せしむるの保證である。(『三田學會雑誌』第二十六卷第十號所載拙稿『貨銀學說史上の収益説』五〇二頁參照)。然しながら、斯くの如く生産者をして其の労働の所産を安全に確保し使用せしむること、曩々に述べた如く、社會の各員に對して幸福の平等なる配分を享有せしむることとは相互に相容るゝものであらうか。分配の平等は生産をして豊富ならしむるあらゆる努力を破毀することはないからうか。彼は言ふ、「茲に、人類の置かれた殘忍なるディレンマが存する。茲に、『如何にして平等を安固と調和せしめ、如何にして公正なる分配を持続せる生産と一致せしむ可きか』と云ふ解決せらる可き倫理科學の重要な問題が存する」と。(ibid., p. xiv.)。ベンサムは安固が平等よりも一層重要であり、而して、是れ等のものが互に矛盾なきを得ない場合には、常に平等は拠棄せられなければならぬと答へる。適當なる政策は社會を私有財產の根柢の上に基かしめ、而して漸次の改革によつて平等に到達するにある。(M. Beer, A History of British Socialism, vol. I, 1920, p. 220.)。然しながら、マックス・ベーアの如く、此の點に於いて、タムソンはベンサムより外れて、オーベンの軌道に接合すると做し、前者が安固に執着せるに反し、後者は平等を固執するに至れるものと觀るは、吾人の同じ得ざる所である。(ibid.)。タムソンは本書中に於いては、飽く迄も安固の制度を固執する。彼れに從へば、富の分配に於ける不安固、即ち富の對象にして又幸福の手段たる労働の所産を其の生産者より強制

的に取り去るの制度は断じて最大幸福を生ずるものではない。彼は平等の爲めに安固を棄てずして、兩者を結合せんとする。タムソンは平等なる安固を通じてのみ、最大幸福は實現せられ得るものと思惟する。(前掲拙稿五〇四一六頁参照)。

ベンサムの功利主義の顯著なる特色たる快不快の算法が、經濟學上に於ける價値に關する限界效用の概念を解明するが爲めに利用せらるゝに至る迄には、猶ほ若干の期間を必要とするのであるが、而もタムソンは前述の如く、勞働價値學說を信奉しながらも、偶々這般の方向に其の歩を進めてゐる。彼曰く、三十日間引き續き小麥を使用し、若しくは三十倍の分量を使用する人は、單一なる配分を使用する三十人の消費者に等しき享樂を之れよりして取得することなかる可きであると、「蓋し、彼等の各々は取得の新奇を享樂す可きであるが、最初のもの以後のあらゆる部分は愈々益々斯くの如き性質を失ひ、而して三十配分の消費者に對しては漸次無頓着(*indifferent*)と爲る可きが故である」。加之、是れ等三十人が之れを食ふ單純なる肉體的享樂は等しく享樂しつゝある周圍の者の満足に就いての同情の快感によつて増加せらる可きであるが、三十配分の單一なる消費者の享樂は同等なる配分を奪はれたる者の嫉妬と怨恨とによつて減少せしめられて殆んど無に歸す可きである。(ibid., p. 93.)。

タムソンを以つて觀れば、資本階級は政權によつて勞働の所産を生産者の承諾なくして掠取する。是に於いて乎、富より生ぜしめ得可き最大幸福を實現する新たなる社會制度は打ち建てられなければならぬのである。分配の自然法則、即ち之れを遵守することが富より誘導せらるゝ最大幸福を取得するが爲めに必要なる一般準則は、第一に、總べての勞働は其の方向及び續否に關して自由且つ任意でなければならず、第二に、勞働の總べての產物は是れ等のものゝ生産者に對して確保せられなければならず、第三に、是れ等生産物の總べての交換は自由且つ任意でなけ

ればならぬことを命ずる。(ibid., pp. 6, 178.) 即ち富に關する安固は是れ等二つのものを包含する。最大生産に資する這般の眞個且つ平等なる安固は又最大可能なる平等を齎すものである。(ibid., p. 97.)。

四

タムソンは富の強制的不平等によつて實際に生ぜしめらるゝ害惡に就いて述べる。第一に其の倫理的害惡として舉ぐ可きものは左の如くである。(一)富の過度の不平等、即ち分配の自然法則(自由勞働、其の產物の完全なる用益及び任意交換)を支持するに必要なもの以上に出でた總べての不平等はより大なる人數の幸福の總體を減ずるによつて、人間の享樂の總額を減ずる。(二)そは其の結果の平衡上、より大なる配分を所有する少數の幸福に對して附加する所がない。(三)そはより大なる配分を有する者、甚だしく富裕なる者に在つて奢侈其の他の積極的惡徳、延いては又、災厄を生ずる。(四)そは仰望と模倣とを激生し、斯くして又、是れ等富者の惡徳の風を社會の其の他のものゝ間に弘布するか、若しくは甚しく富裕なる者に關する彼等の相對的地位より生ずる他の惡徳を彼等の間に生ずる。第二に舉ぐ可きものは其の經濟的害惡である。(一)過度の富の年々の所得は不生產的勞働者等によつて消費せられ、斯くて又、其れだけ國民的勞働の生産物の年々の損失たるのである。(二)そは其の報酬に於いて最も不安固且つ不平等であり斯くて又國民的福祉に資すること最も少なき技術及び職業を獎勵する。第三に舉ぐ可きは其の政治的害惡であつて、そは其の教育に於いて正しく之れを行使するの資格なく、又一般的若しくは國民的利害と相反する利害を有する者によつて立法、行政及び司法の權を篡奪せしむるの結果と爲るのである。(ibid., pp. 180-220.)。

タムソンは更らに分配の自然法則の附帶的利益を擧げる。第一に政治的方面を觀るに、是れ等のものは代議政體

以外の如何なるものとも相容ることなく、諸國民をして戰役を好まざらしめ、彼れ等をして防備を強固ならしめ、犯罪を行はしむ可き最大なる動機を除去し、行政費を最低の標準に下降せしめ、而して總べての宗教團體の支持を任意ならしむるに存する。第二に經濟的方面を觀るに、生産は急速に、且つ是れ迄知られざる範圍まで増加し、資本は蓄積せられる。第三に倫理的方面を觀るに、過度の貧困と過度の富とは社會より除去せらるゝが故に、奢侈と缺乏とから必然的に生じて来る特殊の不徳は殆んど根絶せしめらるゝのである。(ibid., pp. 223-271.)。

タムソンは又、知識の取得及び普及を以つて、生産及び享樂を増加し、分配の自然法則の永續を確保する手段と看做してゐる。(ibid., pp. 272-362.)。

次いで著者は不安固の諸制度より結果する富の分配の現状を敍し、而して斯くの如き現存の不平等なる強制的分配方法を分配の自然法則に基ける任意的方法に歸せしめ、單に安固によつてのみ限定せらるゝ平等を誘導するの手段を論じてゐる。(ibid., pp. 363-366.)。此の部分は前述の如く其の項目を列記するに止まる。更に彼は相互協同と比較せられたる富及び幸福取得上に於ける個人的競争の利害に就いて述べる。再版は此の部分を別箇の章となしてゐる。

最後に、タムソンは財富分配上に於ける任意的平等の制度の本質的及び特性的諸相を述べ、而して相互的協同に依る斯制度は果して實行可能なりやの問題を論じて筆を擱いてゐる。(ibid., pp. 381-600.)。彼は言ふ、「此の『如何にして完全なる安固と分配の平等を調和せしむ可きか』と云ふ大問題の解決を合理的原則の上に企圖し而して提唱するだけの大膽さを有して居つた人がある。此の人物こそ蘇格蘭ニュー・ラナークのオーレン氏である。相互的協同と分配の平等とは彼れが依つて以つて工作せる用具であつた」と。(ibid., p. 384.)。彼は年產物の分量及び

分配が現實の蓄積及び分配に比して遙かに重要なもと觀る。「凡俗の眼は常に、特に少數個人の手中に提示せられた際に、蓄積せられた大量に驚かされる。年々生産せられ消費せらるゝ大量は、大河の永遠にして又數へることの出來ぬ波の如くに移動して、忘れ去らるゝ消費の大洋中に消えて行く。然しながら、全人類は、啻だに殆んど總べての満足のみならず、存在をすら此の永遠の消費に仰いでゐる。是れ等年產物の分量及び分配は須らく考察の至高の對象たる可きである。現實の蓄積は結局第二次的重要性的ものであり、而して年生産物の分配に及ぼす其の影響から斯かる重要性の殆んど總べてを取得するのである。富より引き出さるゝ幸福が本書中に於いて考察せられたのは斯くの如き見地に於いてである。現實の蓄積及び分配は常に生産の力に關聯し又從屬して考察せられて來たのである。殆んど總べての他の體系に於いては、生産の力は蓄積に、又現存分配様式の永久化に關聯し且つ從屬して考察せられて來たのである。强力、詐欺及び偶然の結果を永續せしむることが安固と呼ばれて來た。而して、人類の總べての生産力は此の偽りの安固を支持するが爲めに假借する所なく犠牲たらしめられて來たのである。而も、本書中に於いては、如何なる實際の分配様式と雖も、そが富者と等しく貧者も亦包含せらるゝ全社會の幸福の優越を助成するに資する場合を除いては、一瞬間の顧慮にも値せざることが主張せられる」。(ibid., p. 589.)。

然しながら、タムソンは、彼が本書の述作に從事しつゝあつた當時に於いては、未だ前掲の原則を最も能く追求し得可き社會形態に關し、完全に明確なる觀念を有して居らなかつた。彼は此の書の卷末に於いて、這般の望ましい分配を實現するの手段を以つて(一)單純なる代議制度、(二)限嗣相續財産、長子相續權、地方的並びに一般的組合、直接又は間接の賃銀規制、業務に關する知識・職業の獨占、保護金及び其の他平等の安固即ち分配の自然法則と相容れざる總べての方策の完全なる廢止、(三)知識の進歩及び普及並びに總べての社會による其の眞利害の漸

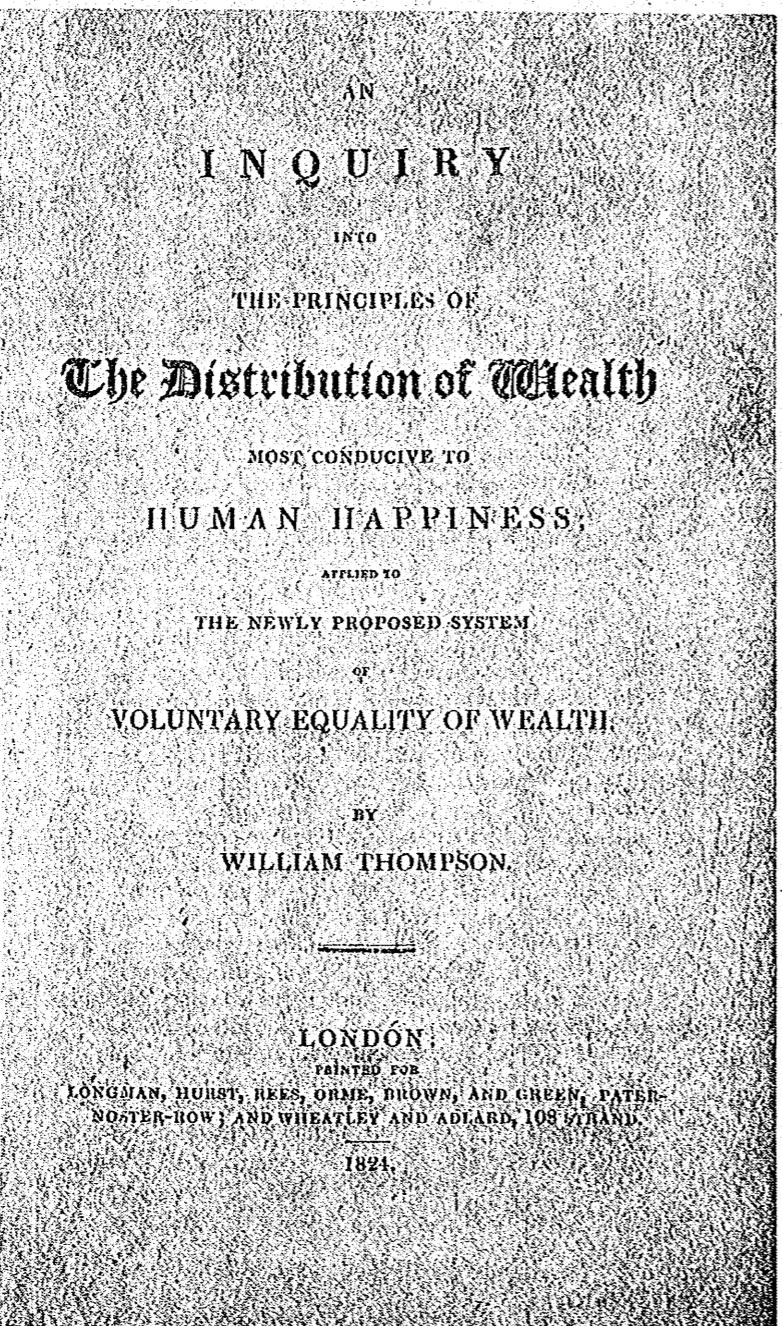
次的認識と做してゐる。(ibid., p. 600.)。

五

本書は、一千八百五十年に之れを省略して出版したウイリアム・ペー^ア(William Pare)が其の序文中に於いて「印刷機から死産した」と云つてゐる通り、久しう間忘れられて居つた。(ibid., a new edition by William Pare, 1850, p. vii.)。ペー^アは本書初版上梓の當時に於いては、其の進歩せる教義を受け容る、準備が人の心に出来てゐなかつたと稱してゐるが(ibid.)、然しながら、タムソンの文體の瑕疵が此の著の效果に障害を與へたものとも觀ることが出来る。彼はベンサムに心醉するの餘り、啻だに其の學說のみならず、不幸にして其の文體をも採用したと稱せられてゐる。其の冗長饒舌なる文體と其の反復重複の言辭——著者が其の學問的良心を満足せしめんとする痛ましき努力の結果から來た平凡なる事實に對する不相當に精細なる叙述は、此の書をして其の讀者を倦怠に導かしめなければ已まない。

本書は前述の如く、一千八百五十年に再版せられたのみならず、同六十九年には第三版が公にせられた。マルクスもエンゲルスも共に一度ならず此の書の初版を以つて一千八百二十七年に出版せられたものと誤り傳へてゐる。(Misere de la Philosophie, 1847, p. 50; Zur Kritik der Politischen Ökonomie, 1859, S. 64 n.; Das Kapital, II. Band, 1885, S. xvii.)。

茲には第1圖として其の初版本の表題頁を寫真版として掲げる。



圖

六

タムソンは此の著出版の翌年、即ち一千八百一十五年を以つて其の第二著『人類の一
半即ち婦人の、他の一半即ち男子の主張に對する抗論』(Appeal of one half the human race, Women, against the pretensions of the other half, Men, to retain them in political, and thence in civil and domestic, slavery; in reply to a paragraph of Mr. Mill's celebrated "Article on Government.")を公にした。本書はタムソンが、麗人フューラー夫人(Mrs. Wheeler)の境遇によつて明かと爲れるが如き婦人の法律的及び政治的無能力を強く憤るの念に發するものである。此の書の卷頭には同夫人宛てた書翰が掲げられてゐる。(ibid., pp. v-xiv.)當時の社會主義者は概して皆、婦人の權利及び兩性の平等なる自由の闘士であつた。

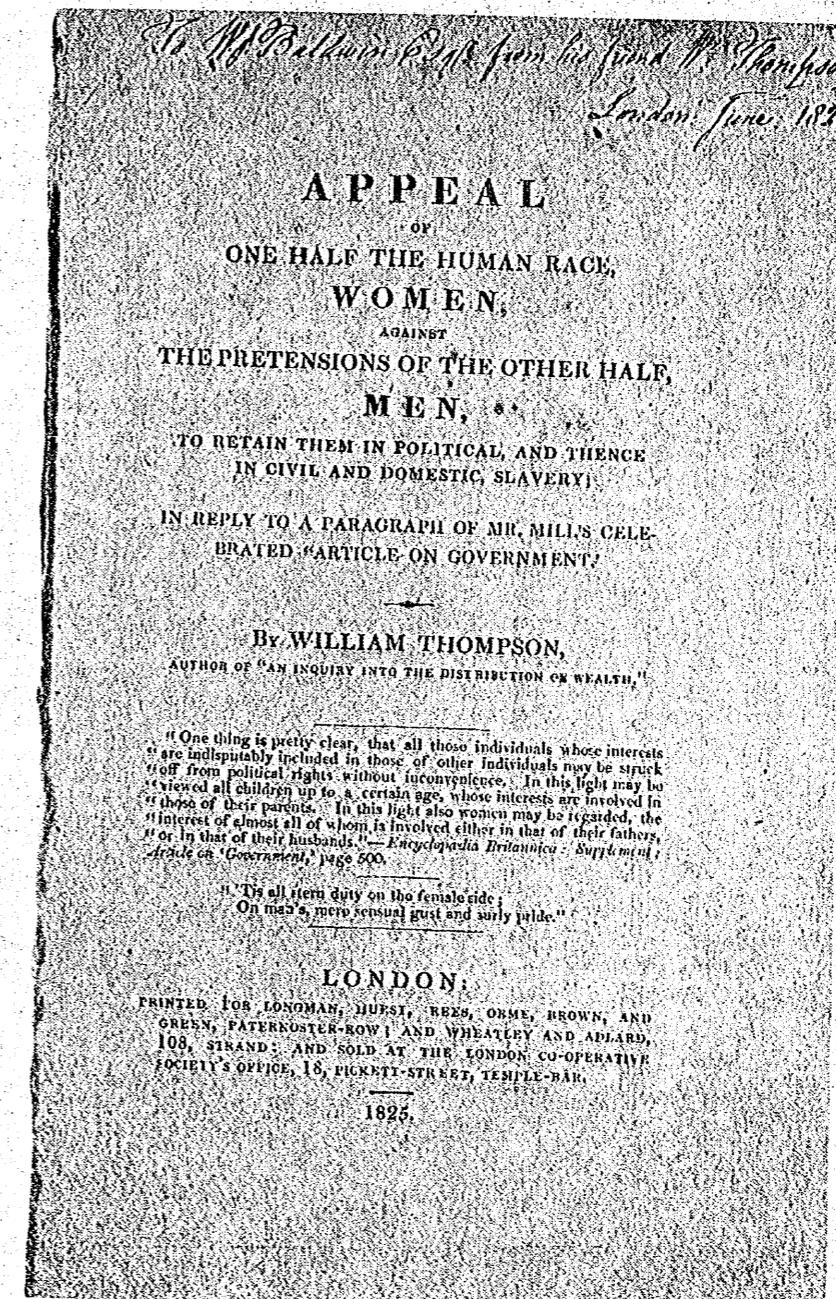
著者の意見に據れば、個人的競争が依然として全社會の基礎であり、個人的富が萬人に依つて追求せらるゝ大目的であり、而して他の事情にして相等しとしたならば、各個人の享有する幸福の量は彼れ等の所有する富の量に依頼する現在の社會的布置の下に在つては、縱令ひ不平等なる法律上及び倫理上の制限にして悉く撤廢せられ而して如何なる勢力の暗流も平等なる正義の新たなる支配を無効ならしむるの作用を爲すことのない場合に於いてすら、婦人は男子と平等なる幸福に到達し得ることが不可能なるの觀がある。或ひは奴隸勞働と云ひ、或ひは自由勞働と稱し、是れ迄人間社會に行はれた勞働制度は區々であつた。或ひは君主政治と云ひ、或ひは貴族政治と稱し、若しくは民主政治と呼んで吾人を支配した政體は種々であつた。然しながら、男子の境涯は如何に變化流轉しても、彼れ等は常に女子を其の奴隸として保持して來た。婦人の體力が男子よりも常に劣つてゐると云ふこと、妊娠及び哺育の爲めに屢々勞働不能の状態に陥るの二事情は、財富獲得の競争場裡に於いて一般婦人の努力をして、永く男奴隸たることの多いものである。(ibid., p. 61.)。

個人的競争の下に在つては、強力は一切の物を奪ふ。個人的競争は、婦人に特殊なる能力と艱難とに對して何等の補償をも與へてゐない。男子は墳木なる物質的富の給與によつて婦人の自由を奪ひ、而して永く彼れ等をして其の奴隸たらしめるのである。單純なる動物的肉欲と指揮命令の快樂とは、現存の社會に於ける男子が大多數の婦人より求むる唯一の快樂である。其の奴隸にして愈々美しくして愈々纖弱ならんか、此の野獸の快樂は愈々大である。野獸的男子は婦人との平等なる交際から生ずる知識的同情的快樂を享有することが出來ぬ。恰度、それは饑鼠が日の恵みに浴した地上の世界に於ける美と光とを享樂することの出來ぬのと一般である。

著者に從へば、男女兩性間に幸福の眞の平等を生ぜしむるのは、惟り其の相互協同あるのみである。協同の世界に於いては、婦人は筋力の點に於いて男子と等しく勞働することを要求せらるゝものではない。彼れ等は唯だ共同の幸福に對して其の能ふ所のものを貢献すれば足る。先天的たると後天的たると、又精神的たると肉體的たるとを問はず、一切の能力にして提供せられ、利用せられんか、そは協同の世界に在つては等しく尊重せらるゝのである。共同は男子からあらゆる壓迫の手段を奪ふが故に、婦人は不平等なる服従に甘んず可き理由を有せざるに至る。

第

圖



而してタムソンは「婦人の隸屬が男子を無知と專制の害悪とに括り附けたと等しく、婦人の解放は、知識と自由と幸福とを以つて男子に酬いるのである」と論結す。(*Ibid.*, p. 213.)

吾人は久しう以前に、此のタムソンの第一著を基礎として小論文を草したことがある。大正十一年版拙著『協同主義への道』中に收録せられたものが是れである。(同書第六論文、『自由競争と婦人の隸屬』参照)。茲には此の書の扉を第一圖として掲げることとした。私藏本は著者が其の友人ボルドウェイ(Baldwin)に贈呈したものである。

七

タムソンは一千八百一十七年其の第三著『醒らされたる労働』(Labour Rewarded. The Claims of Labour and Capital conciliated; or, How to secure to Labour, the whole products of its exertions. By one of the Idle Classes.) を出版した。本書は、労働は價値の唯一の創造者であるとの獨斷的意見より出發して、トーマス・ホッズキン(Thomas Hodgskin)の著 Labour Defended. に現れた非資本主義的個人的生産の半無政府主義的主張に對抗して、前述せる意見の基礎の上にオーエン流の社會主義的議論を展開せしめたものである。ホッズキンの著は非資本主義的階級闘争的精神を以つて書かれたものであつて、資本は生産的なむせるが故に、資本の所有者は國民的收益の如何なる配分に對しても權利なきものであると推論する。然るにタムソンの主張に據れば、精神的労働者は物質的意義に於ける富を生産するものと稱せらるゝこと能はざるが故に、斯くの如き推理は是れ等の人々よりして所得を奪ふこと、爲る可きである。報酬に對する權利を構成するものは效用の生産であつて、物質的富は單に其の一分枝に過ぎざるものである。

タムソンは此の書の披露文(Advertisement)に於いて、本書の目的は、富の生産、蓄積及び分配に關する現存社會原理に完全なる變化を生ぜしむるに資し、而して之に代ふるに更らに普遍的なる快樂及び幸福に役立つこと大なる新たなる行爲の諸原理を以つてするに存すると稱してゐる。現在の行爲原理の存續する限り、多少の間諛を隔てゝ、恐慌に次ぐに恐慌を以つてするであらう。此の體制の永續不斷の慢性的災禍は思ひに耽る人に取つては等しく悩ましいことである。總べてのものゝ組織中に固有であり、總べての有用なる現存諸動機と相一致するものであつて、而も是れ迄、愚蒙なる制度及び後天的慣習及び意見によつて、啻だに鼓舞せられざるのみならず、抑壓せられて居つた行爲の新原理は喚起せられなければならぬ。(ibid. advertisement.)

タムソンは其の第一著『分配の原理』に於いては、未だ其の原理を最もよく追求し得可き社會形態に關し、完全に明確なる觀念を有しては居らなかつた。彼は當時に在つては、個人主義的方向を辿つて、小獨立生産者より成る社會を目標としながらも、而も、ロバート・オーレンの社會主義的協同の計畫に強い贊意を表明して居つたのである。即ち、彼は猶ほ獨立生産者の自由にして原始的な民主的社會と任意的社會主義制度の下に於ける結合労働との間に逡巡しつゝあつたのである。然るに、此の『酬いられたる勞働』に於いては斯くの如き逡巡は全く其の跡を留めてゐない。本書中に於いては、彼は他のあらゆる社會制度、殊に前掲ホッズキンの著中に於いて提唱せられた自由にして競合的なる小生産者の組織に對して、協同の制度を擁護する。彼は生産的協同組合の設立に依る労働解放の構成的計畫を立てたのである。

彼の意見に據れば、單なる個人的生産に依つては、如何なる巨富も是れ迄に決して蓄積せらるゝことなく、又、蓄積せらるゝを得なかつた。享樂を愛するの念は極めて大であつて、一人の勞働者が他の者の四倍の分量を生産す

ることが出來たとしたならば、此の増加せる生産の殆んど全部は自我的若しくは社會的享樂に供せられて、蓄積に當てらるゝことがないであらう。然るに、頗る巧妙にして有爲なる勞働者が、其の階級の平均消費額以上に生産せるものゝ全部が彼によつて蓄積せられたと想像するならば、彼は是れに由つて吾人が財産と稱する所のものを取得する上に於いて如何に其の歩を進む可きであらうか。惟り強奪、詐欺的若しくは任意的交換のみが個人的富の大集積を取得する有效なる手段である。是に於いて乎、「勞働の全収益は勞働者に屬さなければならぬ」と云ふ一般命題を實現するが爲めに、勤勉なる階級が依頼しなければならぬものは交換の規制である。這般の規制は強力によるものでも、又、法の規制によるものでもなく、生産に先き立てる勞働者自身の間に於ける任意的契約によるものでなければならぬ。(ibid. pp. 10-13.)

タムソンに從へば、勞働者の組合は、個人的競争の害悪を減少するが爲めの努力であつて、是れ等のものが說得によつて作用する限りに於いては推稱せらる可きものである。是れ等の組合が其の員數を制限するが爲めに徒弟制度を利用する限りに於いては、一部の勞働者より有利なる市場を奪ふによつて不正の行動を爲すものである。(ibid. pp. 75-76.) 是れ等の組合が利潤の損失に於いて賃銀を引き上げんことを企つたならば、資本は他の職業に移動する可きが故に、そは精々競争制度の害悪の僅かに一部を回避し得るに過ぎない。(ibid. p. 78.) 加之、一組合が自己の職業に於ける賃銀を引き上ぐるに成功す可しとしたならば、勞働者は他の職業より來つて競争を開始す可く、同一職業の勞働者は外國より移住して賃銀を引き下ぐ可く、又、不熟練勞働は其の職業に參加せんことを求む可きである。外國人の競争に對しては、何等正當なる救濟策も存することがない。總べての勞働の中央組合は賃銀を高く維持することを得可きであるが、而も、之れを設立することは極めて困難であらう。(ibid. p. 83.) 組合は其

の成員の間に知徳を弘め、勤勉なる者と怠惰なる者との間の軋轢を和ぐるに資す可きものである。マックス・ベーアの語を借りて言へば、ホッヂスキンに在つては、労働組合は闘争的組織である、彼は一千八百二十四—五年に於ける労働組合を其の儘に觀たのである。タムソンに於いては、労働組合は、著々其の歩を進めて、協同的國家を建設するが爲めに基金の蓄積を行ふを以つて其の目的としなければならぬ。彼は労働組合若しくは勤勉なる階級によつて公然且つ合法的に組織せらるゝ任意的組合が等しく有用なる可きことを認めた。是れ等のものは失業の境涯に陥れる者を援助し、雇主の專恣と我慾とを抑制するの作用を爲し、賃銀を維持し、利潤を抑壓するの效果あるものである。加之、労働組合は勤勉なる階級の知力を充分に發揮せしむるに資するものである。蓋し、報酬の問題は、經濟學、統計學、法律的制度の性質並びに倫理哲學と密接なる關係を有するものであるが、是れ等の題目は労働者が是れ迄其の理解の外に存するものと思惟し來つた所であつたからである。最後に、労働組合は労働者を導いて、彼等の方法は總べて其の労働の全収益を彼等に確保するに不適當なることを發見せしめ、斯くて彼等をして協同經濟學の教義を研究せざるを得ざるに至らしめるであらう。労働組合は、労働階級の賃銀並びに其の知識的道徳的水準を引き上ぐるに於いて、彼等は其の成し遂げ得る總べてのものを成し遂げたのであらう。(ibid., pp. 85-86; Lowenthal, op. cit., p. 40; M. Beer, op. cit., pp. 225-226.)

是に至つて、労働組合は、其の貯蓄せる基本を以つて、眞個の解放事業に著手し、先づ下に掲ぐるが如き計畫に從つて、自己の製作場を建設す可きである。大建築及び機械を必要とする職業に在つては、總組合中に包括せらるゝ労働組合の基金は、其の雇主との不和に由つて解傭せらるゝの虞れある勤勉なる者に仕事を與ふ可き適當なる建築の造営及び最良なる機械の購入に永く充當せらる可きものである。各種大工業の中心地に接して是れ等の製作場は

建設せられて、資本の犠牲者に對する一種の避難所と爲る可きである。是れ等の組合製作場に於いて勞作しつゝある者の労働の所産から、管理費及び資本の減價償却費を控除せる殘餘は悉く労働者に與へられる。組合は斯くして仕事を授けらるゝ者を獎勵して組合製作場の株主たらしむることを努めなければならぬ。一株の金額を拂ひ込める各個の労働者は、孰れも資本家的労働者と爲り、斯くて其の労働の所産の増大せる部分を享有す可きである。固より容易に獨立し得るの便宜は、男子に對すると等しく女子に對しても亦、あらゆる部局に於いて、同様に開かれる。何人と雖も、一株以上を購入することを許されない。斯くて、是れ等の組合製作場は労働者自身の株式會社にて所有せらるゝことゝ爲るが故に、勤勉正直なる者の失業に對し、絶えず避難所を與ふるが爲めに、他の建築及び常に新たなる機械は、組合によつて、其の基金を以つて設置せらる可きである。是れ等組合製作場に作業じつゝある労働者は、啻だに是れを以つて満足すること能はず、更らに進んで、其の建築物の敷地に對する地代の支拂、並びに其の使用する原料品に對する利潤の支拂を免れ、競争の不定と、資本家によつて經營せらるゝ同一企業の對抗と、一般市場に依頼する業務の動搖とを完全に脱するが爲めに、土地を購入し、農業的組合を形成し、而して最後に其の相互的欲望を充足する協同的生産團體を形成するの必要に迫られる。「労働」の向上進歩は、労働組合から、知徳の發達を經て、相互協同の彼岸に到達するに存する。(Labour Rewarded, pp. 87-93; Beer, op. cit., pp. 225-227.)

八

タムソンの第四著「共同團體の急速にして且つ經濟的な設立に對する實際的指導」(Practical Directions for the speedy and economical establishment of Communities, on the Principles of Mutual Co-operation, United

Possessions, and Equality of Exertions, and of the Means of Enjoyments.)は一千八百三十年、オーヨン主義的協同及び労働組合の急速且つ大規模の發達が恰も開始せられつゝありし際に出版せられたものである。此の小冊子は協同的社會に於ける建物及び敷地並びに生活方法の細目を述べてゐる。彼の考案は此の書に至つて更らに成熟した。彼は此の書中に於いて、一共同團體に加入するに際しては、自由の必要を主張してゐるが、而も一度び加入して其の成員と爲るや、自由は平等の爲めに全然犠牲たらしめるゝことを認めてゐる。安固の原理は是に至つて實際上平等の原理の爲めに拠棄せられたるの觀があるのである。各員によつて遂行せらるゝ勞働の性質は一般投票に依つて決定せられる。そは實際上團體の被選支配者によつて確定せらるゝことを意味するのである。彼曰く、「產業的階級に對する業務の缺乏若しくは不確定は現存の社會組織に於ける最大なる害惡である。業務缺乏直の接原因は何であるか。販路若しくは市場の缺乏である。財貨は生産せられた時、全然販賣せらるゝことを得ないか、又は生産費を償ふ可き價格を以つて販賣せらるゝことが出來ず、従つて、製造業者は永久にして且つ有利なる仕事を與ふることを得ない。救濟策は明かに、總べての種類の有用なる產物に對して確實なる市場を看出すに存する。

九

協同的產業の組織は、全世界に亘つて徒らに外國市場を求むるに非ずして、(斯くの如き市場は發見せらるゝや否や、直ちに、餓えたる生産者の止むことなき競争によつて在荷過多若しくは供給充溢と爲る)、食料、被服、居住及び家具に關する最必須なる欲望の全部を自ら直接且つ相互的に充足するを目的として、相互の爲めに共同して勞作するに由つて、互に市場を供し合ふに足る可き員數より成る勤勉なる階級の任意的結合によつて之れを成就するものである」と。彼は尙ほ此の書中に於いて「執務の時間が努力の尺度でなければならぬ」と稱してゐる。(註1, p. 7.)

タムソンは一千八百三十年に遺言狀を認め、コーク郡に於ける自由保有不動産より成る其の財産の大部分を『分配論』新版を刊行せるペーアをも其の一人とする保管委員の手に委し、彼が久しく唱道し來つた原理を更らに一層弘布せしめ、而して卑賤階級の是れ等原理に基けるあらゆる實際的運動を援助するの目的に供し、而して又「感ずることの出來ぬ死せる肉體を生ける肉體の利益の爲めに試験する仁慈なるも而も施術者に取つては最も不愉快にして且つ往々にして危險なる過程に關する愚昧にして而も往々最も有害なる偏見を征服するに資するが爲めに」、彼は「其の書籍其の他が不列顛又は愛蘭に於ける最初の協同團體の圖書館中に保存せらるゝと等しく、其の肉體が解剖學の講師によつて、彼が、骨骼の形で、自然及び人工の骨を、人類及び比較解剖博物館に保存せらるゝが爲めに返還するを條件として、公然試験せらる可きことを遺言した。當時に於いては屍體解剖に關する偏見強く、竊取に依るもの除外すれば、死刑囚の屍體の外、解剖の用に供せらるゝものを取得すること能はざるの有様であつた。(Distribution, new ed., p. xvii.)。

タムソンは一千八百三十三年三月二十八日、コーク郡ロースカアベリ男爵領クロンキー(Clounkeen, Clonkeen, Clounksen, Clounksenなど種々に綴られてゐる)の其の邸宅に於いて肺炎の爲めに長逝した。彼は性來蒲柳の質であつて、其の死に先き立つ約二十年間は菜食と禁酒とを遵守し續けた。(Distribution, new ed., p. xviii; Practical Directions, p. 203.)。彼は引き込み勝ちな幻想家であつて、社交よりも研究に多くの時間を過し、其の藏書に親むよりも自己の思想に耽悦することが多かつた。(Morgan, op. cit., pp. 318-319.)。彼の遺言中屍體解剖に關する件は無知なる附近の農民の激烈なる反対があつたに拘らず、同意せられたのであるが、而も財産の處分に關する件は親戚中の或る人々の反対によつて訴訟沙汰と爲り、ペーアが其の『分配論』の新版を上梓する頃までは未だ愛

蘭大法官廳の裁判に掛けられて居つた。(Distribution, new ed., p. xvii.)。

彼は毎週チャンセリイ・レインに於いて公開討論會を開いて居つたオーエン主義者の倫敦協同協會 (London Cooperative Society) の有爲なる一員であつて、一千八百三十年の『協同雜誌』(Co-operative Magazine) に屢々寄稿した。ジョン・スチュアート・ミルは哲學的急進主義者等によつてオーエン主義者に對して約三ヶ月に亘つて行はれた討論に就いて記してゐる。而して彼はオーエン主義者側に於ける「主たる闘士は余の熟知せるマークのウェーラム・タムソン氏と云ふ甚だ尊敬す可き人物であつた云々」を述べてゐる。(Mill, Autobiography, 1873, pp. 124-125.)

+

タムソンはオーエンに比して更らに深遠なる思想と經濟科學に對する更らに透徹なる理解とを有して居つた。彼の著書にして若し經濟思想史上の傳統に更らに顯著なる影響を有して居つたならば、彼は恐らく社會主義の創始者として第一位を與へらる可きものであらうと云はれてゐる。彼は「労働は其の生産する總べてを享有する」とがな」と曰々思想をオーエンよりも遙かに確りと把んで居つた。「労働全收益權」(Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung, 1886.) の著者アンソーン・メンガーは彼を以つて「科學的社會主義の最も卓越せる創始者」と呼び、(Ib., 3. Auf., 1904, S. 51.) 而して、「斯くの如き英佛の社會主義、殊に初期の其れに關する殆んど完全なる無識は、マルクス及びロードベルトスの著作が現在獨逸に於いて享有する不相當なる尊重に對して少なからず貢献する所があつた。(中略) 余は此の書中に於いて、マルクス及びロードベルトスが何等の謝意をも表することなくして、英佛の理論家より其の最も重要な理論を借用せることを立證せんとするのである。洵に、多數の人々が進んで科學的社會主義の創始者と看做さんとするマルクス及びロードベルトスは事實上

其の深刻さと徹底さに於いて彼等の先驅によつて遙かに凌駕せられてゐることを主張するに躊躇しない」と述べてゐる。(Ib., S. iv.) 「コルソン教授も亦、タムソンの『分配論』を以つて「マルクス社會主義の基礎」と做してゐる。(J. Shield Nicholson, The Revival of Marxism, 1921, p. 52.)

而も、吾人は固より彼を以つて「科學的」社會主義の創始者と呼び、マルクス等が彼に負ふ所を過大に見積ることを避けなければならぬ。彼は其の理論を唯物史觀の上に打ち建つることなく、又暴力の行使を全然否認するものであつた。彼は理性の作用と早年の教育と知識の普及とに由つて拘束が撤廃せられさへすれば、財富及び享樂資料分配上に於ける自發的平等の制度は確立せらる可きことを期して居つた。而して彼は斯くの如き制度を建設するが爲めに暴力を用ひんとするの舉は總べて之れを拒否した。彼はオーエンと等しく、私有財產の沒收が害悪を救治するものではないと思惟した。而して、彼も亦、勞作者が其の労働の全收益を自己に保留し得可き企業の新形態を建設せんことを欲したのである。フォックスウェル教授が前記メンガーの著のタンナード譯緒言中に引用せるが如く、タムソンは不幸なる倫敦スピッタルフィールズの職工に書を寄せて「諸君は諸君が労働の全產物を自ら享有せんと欲するか。諸君は單に諸君が労働の方向を變すれば足る。諸君は諸君が知ることのない者の爲めに勞作することなく、相互の爲めに勞作す可きである」と説いてゐる。(The Right to the Whole Produce of Labour, The Origin and Development of the Theory of Labour's Claim to the Whole Product of Industry, by Anton Menger, trans. by M. E. Tanner, with Introduction and Bibliography by H. S. Foxwell, 1899, p. xlvi.) 彼れは終に空想的社會主義者の域を脱することを得なかつた。

タムソンの言ふ所に據れば、經濟學及び之れと關聯せる種々なる知識の部門に就いて觀察し、熟慮し、若しくは

記述せる人々は主知主義的及び機械主義的の二種類に排列せらるゝを得るのである。輓近の英國に於いて主知論的思素家中に在つて異彩を放つ者にゴッドウインがあり、機械觀的論究者中に在つて傑出せる者にマルサス(特に其の初期の著作に於いて)がある。彼自身は是れ等兩者の中間の進路を取り、ベンサムの線に沿ふて、確定せられたる經濟學上の諸眞理を社會科學に適用し、是れ等のもの並びに總べて他の知識の部門をして最もよく人類の幸福に資する正しき富の分配に役立たしめんことを目的としたのである(Distribution, op.cit., preliminary observations.)。然しながら、彼が其の推論の基礎として經濟學上の原理を使用せる程度は極めて些少であつて、彼は「在」の原理よりも「當爲」の原理の發見に多くの興味を有して居つたのである。彼は純乎たる科學的研究の目的を以つて其の筆を執らずして、新社會を創造せんとする理想家的希望を以つて其の書を著したのである。

富の分配の問題は現存社會制度に對する社會主義者の攻擊に刺戟せられて初めて經濟學上の中心問題と爲つたのである。タムソンの英國經濟學史上に殘した第一の效績は實に富の公正なる分配の問題を斯學上至高の地位に高めた點に存する。ジョン・スチュアート・ミルが其の大著『經濟原論』に於いて「生產の增加は惟り世界の進歩に後れた國々に於いてのみ猶ほ其の重要な目的たるものである。最も發達せし國々に在つては經濟的に要求せらるゝ所のものは分配の改良である」と稱したる時(Mill, *Principles of Political Economy with some of their applications to social philosophy*, vol. ii., 1848, p. 310.)吾人は啻だにサン・シモン學派其の他の大陸社會主義者のみならず、ウイリアム・タムソンの影響をも亦、認む可きであらう。タムソンは、夙に「經濟の學、即ち、單なる個人競争によつて富を生産するの學は、新たなる學、社會科學、即ち人類の幸福を増進するの學に道を譲らなければならぬ」と主張して居つた。(Appeal, op. cit., p. xiv.)

I. W. L. Crum, *Rudimentary Mathematics for Economists and Statisticians*, 1938

2. R. G. D. Allen, *Mathematical Analysis for Economists*, 1937

寺 尾 琢 磨

經濟學に果して數學が援用さる可きかどうかは曾ては大いに論議されたところであるが、今日これを全面的に否定するが如き人は——數學に全く無智な若干の人々を除けば——先ず無いと言つてよからう。數理經濟學、經濟統計學及び計量經濟學の如き當然數學的な部門に於ては勿論のこと、一般經濟學に於ても簡單な數學式や圖表が事象の説明及び理論の合理的展開に缺く可らざる手段とされてゐる事は周知の事實である。その理由は極めて簡単であつて、要するに經濟學は著しい程度に數量を問題とするからである。經濟統計學では具體的數量を對象とするから疑問の餘地はないが、理論經濟學の領域では、假令數量を問題としても、それが抽象的だとしふ理由から數學の援用を否定せんとする傾きがあつたが、これは全く數學の性質を誤解した結果である。事物に大小増減があれば、假令具體的大さは確定されずとも、數學的に取扱はれる事は今更改めて説く迄もない事である。

數學を以て何等か幽玄不可思議の論理と考へる人の渺くないのは、科學の進歩にとって遺憾千萬な事である。數學は數量に關する最も合理的な言語に過ぎない。普通の言語は、少くとも數量に關しては、甚だ不充分なるを免れ

1. W. L. Crum, *Rudimentary Mathematics for Economists and Statisticians*, 1938

2. R. G. D. Allen, *Mathematical Analysis for Economists*, 1937

一三七 (一四四九)